提言

「魂の書物」の発見をめざして——寺院資料調査研究の現場から——

阿部泰郎

若者たちが集う繁華な街として活気あふれる名古屋大須の中心は、朱彩あざやかな大須観音の伽藍であるが、その龍宮城のような本堂の奥に、日本でも有数の貴重な古文献が蔵されていることを知る人はすくない。まして、その収蔵庫の金庫のような扉を開けて、薄暗い室内でその一冊を紐解き、その一葉一紙を埃を払いながら整理と記録にいそしむ者たちが居ようなど、行き交う人々のなかで想像する人があるだろうか。

毎週、日課のごとく大須文庫に通いながら、時として、ふと、そのような自分たちの姿を誰が知るだろうと思うことがある。だが、知られようと知られまいと、通わなくてはならない。そして、終日、折れ曲がり虫食いだらけになった書物の残骸を一枚づつ皺を伸ばし元の形に戻しながら、判読し記述して、あるべき一冊一巻の姿に復元するための、気が遠くなるような作業に没頭するために歩み入っていくのだ。

こうした復原作業を大須文庫で始めて、六年になる。その過程で〝発見〟が相次いだ。その〝発見〟は、単なる宝探しではない。それは、いささか言挙げすることが許されるなら、人文学（文学・歴史・宗教学・思想史をはじめとする人文諸学）のあたらしい領域や課題へと連れだされる、従来とは異なった世界の〝発見〟と言ってよい。より限定的に言えば、中世日本の宗教的領域——寺院を基盤とし、それを結ぶ法流のネットワークと国家権門の体制の一郭をなす宗派あるいは神社とその組織——それらを往還し活動する人々の営み、うみだし、伝えた知の

所産がこれらの書物である。それが、ひとつの書物のまで伝わらず、永年の間に損じほどけて断簡となった大量のテクストが、国宝『古事記』を戴く大須文庫の底辺を成している。既に世に知られて名高い「真福寺本」以外に、厖大な無名のテクストが積もり重なっている。しかし、「無名」の書物などは存在しない。それらに本来の書名を取り戻させねばならない。真福寺の調査に十年間従事するうちに嵩まった想いを共有する若い院生たちと整理に取り組みはじめて、その間に、それらの書物を著し、写し、伝えた中世の人々の顔が、次第にあきらかになってきたのである。

そのめざましい例として、従来全く知られていなかった栄西の著作群、とりわけ『改偏教主決』（建久九年・一一九八写）の発見が挙げられる。既に『無名集』（治承四年写）『隠語集』（鎌倉初期写）については『中世先徳著作集』（真福寺善本叢刊・二〇〇六）に末木文美士氏の解題を付して納められたが、その前後、牧野淳司氏の手によって厖大な断簡の森の中から一丁づつ撰り出されたのが、『改偏教主決』等の一連の複合的写本である。それは目下、末木氏の許で三名の若手研究者が共同で解読と再構成の復原作業を行っており、去年七月に名古屋大学で行われた研究集会において、その中間報告がなされた（名古屋大学グローバルＣＯＥプログラム第四回国際研究集会報告書『日本における宗教テクストの諸位相と統辞法』二〇〇八）。当時九州にあった栄西が密教の教主論について自説への反論を徹底して論破すべく著した、アグレッシヴな著作であり、彼の密教僧としての面目がよく示された聖教である。

この栄西著作聖教探索を契機かつ試行として、大須文庫の全ての聖教断簡を整理し、デジタル画像を含んだデータベースに収めるという、遠大な目標に向けた作業が二〇〇七年から開始された。その間にも幾多の興味深いテクストが見いだされているが、そのひとつに、尾張長母寺に住んだ無住の逸題談義聞書（文永八年・一二七一成）があった。いま確認されるのはその永仁四年（一二九六）写本の末尾部分四丁分のみだが、栄西のそれと同じく残存する各丁は文庫の全体に散在しているに違いない。それを拾い出して題名を与えることが、この作業の使命のひとつとなった。これよりさき、無住の密教著作として結縁灌頂三摩耶戒作法の一帖が、伊藤聡氏らによって豊田市の猿投神社蔵聖教典籍の断簡中から見いだされた。それも猿投神社（その神宮寺である白鳳寺は、真福寺ともつながる密教寺院であった）の蔵書を悉皆調査し全て整理する過程での発見であった。復原されたその聖教は『猿投神社聖教典籍目録』（豊田市史料叢書・二〇〇五）に収

められている。更なる無住の著作は、二〇一一年に予定され、文学・仏教学・思想史学の連携によって編まれる、無住七百年遠忌記念の研究論集・資料集への収録を目指している。

〝発見〟ということなら、神道思想上きわめて重要な存在であった、伊勢神道（度会神道）の創唱者というべき度会行忠の自筆本『大田命訓伝』が、大須文庫で〝再発見〟されたことも記憶に新しい。かつて昭和十年に大須文庫の整理と目録化の大事業に携わった黒板勝美博士による『真福寺善本目録』で紹介された、その巻軸の「行忠之」の署名が、岡田荘司氏によって確認されたのは、『伊勢神道集』（真福寺善本叢刊・二〇〇五）編集の過程においてであった。この再発見は、単なる追認ではない。この行忠自筆本と一具で真福寺に伝来した行忠著作『神名秘書』を含む伊勢神道形成期の神道書や記録類が、東大寺東南院という宗教権門を介して聚められ、ここにもたらされた消息が明らかになってきたのである。その頂点というべき書物が、東南院門跡聖珍法親王の許で真福寺二世信瑜の書写した、度会家行の大著『類聚神祇本源』（応安七年写）であった。これも、日本思想史の神道研究者（國學院大學と皇學館大学の双方が参加した）との連携によって成し遂げられた発見であり、テクストにしるしづけられたこの事実について如何なる立場をとり解釈されようとも、今後の中世神道研究において、真福寺本は無視することのできない不可欠な座標となることだろう。

これらの〝発見〟は、真福寺をその一環とする中世寺院が、神道説を含む当時の最先端の〝知の体系〟を担い、生成伝承する場であったことを如実に示すものであろう。しかもそれは、中世の時代のなかで、その中枢であった寺社権門が、朝廷や幕府が代表する国家と交渉拮抗し、しかも互いに激しく争う、まさしく抗争の渦中において生みだされた達成であった。その消息も、また大須文庫の史料から鮮やかにうかびあがるところである。鎌倉末期、東大寺東南院は、その巨大な権威を背景として自らを真言宗の「本所」と任じ、醍醐寺や東寺と真言宗のヘゲモニーを争う闘いをくりひろげていた。その訴訟記録が一括して頼心という根来寺僧の許から信瑜に伝領されており、紛争の当事者による草案土台と、その所産としての東大寺縁起など、類を見ない生々しい寺院社会のドキュメントは、稲葉伸道氏によって、断簡から復原された部分も含めて『東大寺本末相論史料』（真福寺善本叢刊・二〇〇八）として編まれ、その全貌が明らかになった。

それらは、たとえば鎌倉末期に『七天狗絵（天狗草紙）』（永仁四年）のような高度に複合した、しかし強いメッ

セージを籠めた宗教テクストが創出され、また、それに対抗するようにして『一遍聖絵』という記念碑的なテクストが成立する、そうした動向の背景に横たわる、諸宗の寺院権門間の抗争と、分裂し対立を深めていく中世国家との葛藤をうかびあがらせてくれるようである。文学の側からすれば、『とはずがたり』が、そうした亀裂のはざまにあって生みだされた作品（テクスト）である。真福寺をはじめとする寺院資料（聖教）の調査研究とは、これらの宗教テクスト―作品をあらたに時代とその思想状況のなかで捉え直し読み直すための豊かな世界への扉を開いてくれる導きの糸なのである。

研究の成果を誇ってみせるのが本稿の目的ではない。本題はここからである。

以上に筆者のかかわるところから示してみた寺院資料の調査研究は、目下、分野を越えて人文学研究者の競って取り組むところとなっている。中世文学研究の分野でも、それは「資料学」として一箇の研究領域と化しつつある（中世文学会編『中世文学研究は日本文化を解明できるか』二〇〇六）。周知のように、その先駆であり範ともなっていたのが高山寺資料調査団の活動であった。その長期に渉る継続と多大な成果は、やはり諸分野の研究者の共同によって自律的に運営されたものであり、きわめて高い水準の研究に裏付けられた資料紹介が体系的に公刊されて学界共有の財産となった（『高山寺資料叢書』）。それは何より資料を伝える高山寺と研究者の、深い信頼関係によってこそ成り立つものであった。

自らが関与する卑近なところでは、二〇〇〇年から始まった勧修寺大経蔵の調査研究も、調査団を結成して〝法人化〟し、原則として団員の会費により調査を運営し、その成果を会誌『勧修寺論輯』を公刊して学界に提供するという形をとっている。その負担は大きく、しかも団員は無制限に増やせないため、必然としてメンバーのうち誰かが科研費等の外部研究助成を獲得し、その費用を支弁することで維持しなくてはならない。だがその助成は期間が限られ、あくまで申請し認められた短期の研究課題の中にその調査研究を含めてプロジェクト化し、その目標を達成するために走り続ける必要がある。そのリレーを連ねることができるなら、それは昨今の状況から見て幸運なことと言わねばなるまい。おそらく他の共同でする調査研究も、似たような条件の許で苦心しつつ行われていることだろう。

たとえば資料を所蔵する寺院が、一切の補助や助成を受けず、自前で調査研究を行うこともあろう。しかしそれは財力豊かな大寺院か宗門の理解に恵まれた本山級の

寺院くらいで、大概はそんな基盤や背景をもたない。また、自治体が博物館か図書館施設にその資料の寄託や移管を受けて保存・研究および公開を行うところもある。称名寺の聖教古文書を蔵す神奈川県立金沢文庫がその代表的な機関であるが、それも長い歴史的経緯と先人の営為の厖大な積み重ねによって成り立ったのであり、むしろ例外的な存在というべきだ。

こうした状況の許で、それら寺院資料の大部分は、未だ本格的な資料調査の取り組みがなされぬまま、寺の経蔵に収められて置かれている。たとえば、おそらく全国でも最大規模の質量の文献を蔵す高野山内の諸院も、本格的な調査が行われ目録が公刊されたのはその中でも正智院など僅か数ケ院であり、高野山大学図書館へ寄託された分を除いては、研究者にとっても未知の領域であり、存在しないに等しい。更に地方の場合には、単なる古文書史料として扱われている場合も多く、その情報すら共有されない。

文学研究の分野にあって、寺院資料の調査研究の動きをつくりだし支えていたのは、国文学研究資料館であった。筆者も携わった伊藤正義先生による西教寺正教蔵の悉皆調査とそのマイクロフィルム化（その目録・奥書集成の公刊が課題である）をはじめ、真福寺もその資料収集事業の一環として取り組まれ、次いで善通寺がその対象となった（その成果の一端は『説話文学研究』四四号・二〇〇九）。この旧文献資料部による「国文学」資料の収集は、全国の図書館、文庫、寺社そして個人所蔵の書物に及び各大学の「国文学」研究者によるネットワークでそれを網羅しようとするものであったが、大学における文学（文系学部において「国文学」は今や殆ど消滅した）研究の改編と退潮に呼応するかのように、その事業のありようも変貌を遂げている。すくなくとも、聖教のような宗教テクストを中心とする寺院資料については、残念ながらそれ以上の展開を領導することはないようである。

一見盛況とみえる寺院資料の調査研究であるが、実のところその足許はきわめて不安定で頼りない。いま、それを支えるのは研究者個人の意欲と献身にほかならない。いうまでもなく、それは研究を成り立たせる基本的な要因であるが、かれ一個人にゆだねられるのは実は危ういことである。自戒を込めて言うならば、研究者の学問的野心や功名心をモチベーションとして動く研究であれば、それはもろく空しいものだ。共同研究が、そうした個々の寄り合い所帯であったなら、その成果もうたかたの如く、後世の検証に耐えないものしか残せないどころか、不毛なものに終ってしまうだろう。何より、当のその

「資料」とはあくまで研究する側の概念に過ぎない。経蔵であり聖教であるその書物群は、それを形成し、伝え、また未来に受け継いでいかなくてはならない責務を負っている当事者にとってみれば、かけがえのない己の拠(よりどころ)ともいうべきものである。調査研究とは、その書物が如何なる意味や価値をもつものかという問いをその当事者と共有する、いわば〝魂の書物〟（折口信夫『死者の書』のことばを借用した）とすることではないだろうか。それを欠いた調査研究は、一方的な収奪に等しい。

調査研究を通して深く関わり学ぶほどに、それら書物を伝えてきた先人たちがどれほどの困難と労苦を経てきたか、そのことに思いを致し、敬意はいよいよ深まる。寺院に限ったことではない。伝えてきた人たちにとって、その成果が目に見える判り易いかたちで還元され、それがまた将来の保存に役立つのであれば、自分たちだけでなく、周囲の社会がその価値を認知し、未来に支えてくれる保証となるだろう。それこそが真の保存につながるのである。調査対象を正確に認識し、それにあるべき形と名を与え、その意味するところと価値を誰にも理解できるかたちで提示することは、研究者の基本的姿勢として言うまでもないことだが、それを仲間内だけではなく、真に社会と共有できるかどうかが問われるのである。そうした問いの前に立つとき、もはや〝宝探し〟は無意味なものとなる。

日本の至るところの寺社・文庫は、巨大なアーカイヴスとして、その全体がさながら人文遺産であり記憶の宝庫である。当世に流行している〝世界遺産〟は、そのお墨付きだけが価値があると信じさせられている人々にとっての魔法の呪文である（残念なことに、すくなからぬ研究者がこの魔法に呪縛されたり片棒を担いでしまっている）が、その認定に一喜一憂するのが滑稽なほど、日本は己の豊かな遺産をその足許に持ち伝えているのである。どうして、その価値を自ら評価できないのであろうか。

目下、大学がその獲得に狂奔するＣＯＥや他の大型研究費をめぐっては、管見の限り、この無尽蔵の記録遺産を未来に胎(のこ)すための志の高い目標などは殆ど認められない（ただ、朝廷の御文庫にあった書物をめぐる目録学の構築が着実な成果を挙げているが、これは雲の上のことであって、筆者が拠って立ち歩もうとするのは下界の広がりである）。一方で、突然降って湧いたような巨額な予算のバラマキを見るだに絶望的な思いにとらわれてしまう。しかし、何とか気を取り直してまた歩みださなくてはならない。

いま、人文学関連諸学会の分野別のコンソーシアム構想が動き出している。それが、旧来の狭い学問分野の枠

内に留まって利害を主張するだけの業界団体となってはなるまい。未来に向けて学術の創造的な発展を期す、そのための連携を支える志と理念を協同して提示することが求められるのではなかろうか。そのとき、我々研究者と市民とが共有するべき、いま、ここにある文化遺産としてのアーカイヴスの価値創出こそが、最も基礎的な土台となり実践として歩み続ける目標のひとつとなるだろう。

（名古屋大学教授）